

内藤とうがらしプロジェクト

NSN新宿(今田済士所長)も参画

東京

江戸時代の俳人・松尾芭蕉は「唐辛子」に関する句を五つ詠んでいる。そのうちの二つが「草の戸を知れや穂蓼に唐辛子」。私の草庵の自慢と言えば人の手がなくとも育つタデやトウガラシです」と来訪者を迎える句とされている。

しかし、これがかつて絶滅して約400年後の現代に復活したトウガラシとなれば、大事に育てようともなるはずだ。その名を「新宿内藤とうがらし」という。

2010年には、新宿名物としての確立や普及を行う「内藤とうがらしプロジェクト」(リーダー・成田重行さん)が発足。地元NSN新宿(今田済士所長)も参画し、活動を行っている。

普及活動の一環として5月25日には、東京都新宿区の都立戸山公園(近隣の目白大生、早稲田大生らによって苗植えが行われた。

当日、公園に行くとき今田所長が「新宿内藤とうがらし」の苗100ポットを積んだ自動車に到着。



苗植えの参加者ら(今田所長=左から2人目)

近隣住民、学生も巻き込み「にぎわい」創出へ

学生らは、プロジェクトリーダー・成田さんらの指示に従って畑にくわを入れ、石や根を取って土を柔らかくしていった。

肥料は、地域住民から提供されたコンポストなど4種類を用意。畑を4区画に分けて、別々の肥料をまき、どのようにトウガラシの苗が育っていくか、生育実験も行う。

次いで、雑草を抑制する黒色の農業用マルチシートを土に被せた後、カッターでシートに穴をあけ、そこに苗を一つずつ植えて作業を完了した。

目白大2年の大野源蔵さんは「結構疲れましたけど、達成感の方が強いです。気になるので、近々に来たら見に来ます」と話し、

早大2年の高木伸大さんは「マルチ(シート)を敷くなど本格的な作業が体験できたのでよかったです。さまざまな方と交流できるのはいいことですね」と満足げな様子だった。

今回植えた苗は、9月ごろに赤く熟す。食用には使わず、子ども向けワークショップなどのイベントと語った。



トで、クリスマスリースの材料といった使われ方をされる。早大生は主に早稲田キャンパス内の田畑を管理・運営しているサークル「農業塾」が、目白大生は社会や地域の課題解決に携わる人材育成の授業の一環として参加した。

同大生を引率した社会学部社会情報学科専任講師の土屋依子さんによると学生らは、今回の苗植えを前に「新宿内藤とうがらし」の関係者として今田所長と会い、話を聴いた。

そこで授業の一部であるディスプレイで利用する日本経済新聞を配っている新聞販売店への理解を深めることも、販売店だからこそできる地域のにぎわい創出、まちづくりの活動もあると今田所長から話され、販売店に魅力を感じていたように思える」と述べた。

NSN新宿の今田所長は「新宿内藤とうがらし」の普及促進運動を通じて「地元企業や近隣大学とのつながりが生まれ、中には日経新聞をアピールできたところもあります。地域の皆さまと一緒に活動する中で、新聞や販売店の存在を強調することができると思います」と語った。

このほか「新宿内藤とうがらし」の苗植えは、新宿区内で5月19日に首都医校、同27日にJR新宿駅・東口駅前広場でも行われた。

このうち同広場の活動は、JR新宿駅社員が中心となり、地域の人々と共に育てる「Shinjuku Farm Project」の一環。今田所長も「内藤とうがらしプロジェクト」の一員として参加した。

リーダー・成田さん(中央上)の指導を受け、苗を植える目白大生の皆さん